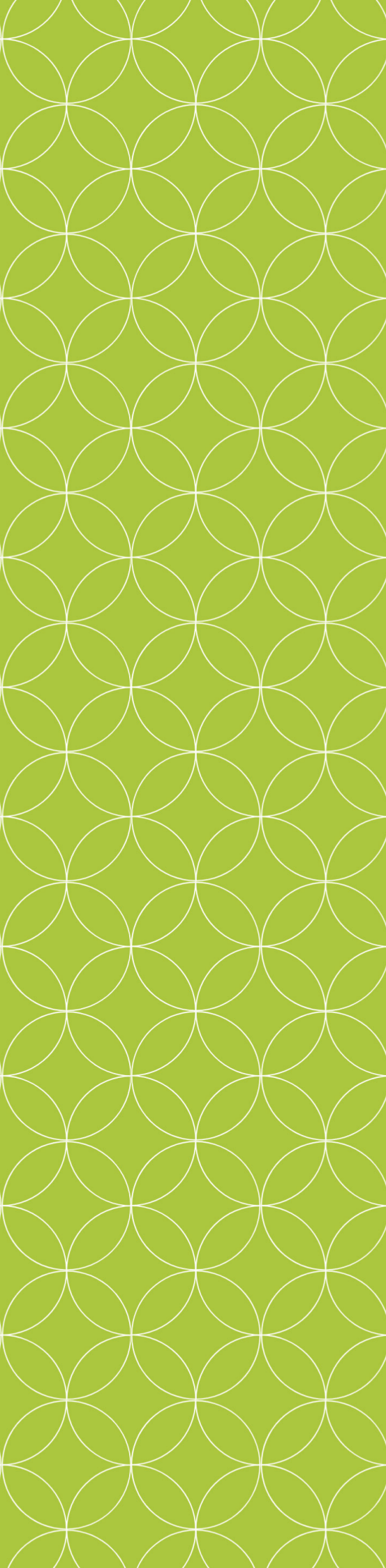


ン?

キニナル

シンボル



ン?キニナル(ん?気になる) シンボルとして、毎年甲府で開催される世界一の武者行列、「信玄公祭り」に使われる武田二十四将の旗印を紹介しています。

<本項について>

- ・本書内に掲載されているシンボル・画像・イラスト・文章・データ等の無断転載および無断転用をかたく禁じます。
- ・シンボルおよび画像の著作権・所有権・商標登録における権利等は、所有者（または貸出主等）に帰属します。
- ・上記、著作権等の権利やその他本書に関するご不明な点におかれましては、コウフシンボル 500 制作委員会（メールアドレス：kofulifelab+ks500@gmail.com）へご連絡ください。



武田左馬助信繁  
(たけださまのすけのぶしげ)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1525~1561 出自は武田氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。武田左馬助信繁は信玄の弟で、よく信玄を助けた。川中島の合戦で戦死

官職である左馬助の唐名から「典厩(てんきゅう)」と呼ばれ、嫡子・武田信豊

も典厩を名乗ったため、後世「古典厩」と記される。武田二十四将においては武田の副大将として位置づけられている。信繁は大永5年(西暦1525年)、信虎の二男として生まれた。兄の信玄に劣らず聡明で、長ずるに従い文武両道に優れた人物だった。永禄4年(西暦1561年)8月、上杉謙信と信玄は川中島の八幡原で決戦。武田軍は上杉軍を前後から攻撃する「啄木鳥の戦法」を策したが、逆に奇襲を受けてしまった。大混乱に陥った本陣を、信繁は死力を尽くして守り抜き、花々しい戦死を遂げた。

NR



武田刑部少輔信廉  
(たけだぎょうぶしょうゆうのぶかど)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1532?~1582 出自は武田氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。武田刑部少輔信廉は信玄の弟。絵が巧みで信虎画像や、大井夫人画像などを描いた

信虎の三男(実は四男ともいわれる)。生母は大井氏で、信玄・犬千代(早世)

・信繁・信廉は同腹の兄弟である。信廉は、武者としての活躍よりも、画家としての実績の方が著名で、父武田信虎画像、母大井夫人画像などを残している。兄信玄の死後、出家して逍遙軒信綱と称し、勝頼を補佐した。武田氏滅亡後、織田軍に捕らえられ、立石で殺害された。逍遙軒(しょうようけん)と言ったほうがよく知られており、信虎の三男で信玄、信繁の同母弟である。川中島合戦後、信繁亡き後は親族衆の筆頭として信玄を補佐した。信廉の容貌は信玄に酷似していたといわれ、数々の合戦で“影武者”をつとめ、信玄没後も敵を欺くために信廉が身代わりをしたという話も伝えられている。

NR



穴山玄蕃頭信君  
(あなやまげんばのかみのぶきみ)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1541~1582 出自は穴山氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。穴山玄蕃頭信君は信玄の娘婿で陸奥守とも称した。剃髪して梅雪齋、または梅雪入道と称した

信君の生母は信玄の姉南松院殿、正室は信玄の息女見松院殿である。信君

は、今川氏とも親交が深く、信玄の今川攻めに際しては、今川家臣の調略を担ったという。長篠の合戦で、山山景昌が戦死したため、駿河江尻城主に就任し、織田・徳川・北条三氏の圧力を防いだ。武田氏滅亡の際には、織田・徳川両氏に降伏し、武田氏の再興を夢見たが、本能寺の変に巻き込まれ死亡した。信君というより梅雪といった方が一般によく知られている。武田親族集筆頭頭格のたちばである穴山梅雪は多くの人が「武田家滅亡直前、徳川に寝返った離反者」と伝えられているが、本当に自欲の為だけで武田家を裏切ったのかについては様々に推測が起きている。現在では武田家救済の為、あるいは武田の家名存続を求める為に、家康を頼っての離反であったとの見方もされている。

NR



板垣駿河守信方  
(いたがきするがのかみのぶかた)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1489?~1548 出自は板垣氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。板垣駿河守信方は武田氏の譜代家老で、甘利備前守と並んで両職(りょうしき)という最高職に就任していた重臣

甲斐源氏の支流にあたり、武田氏を支えて活躍した。天文10年(西暦1541年)の武田信虎追放の際には、甘利

・飯部らの宿老を説得し、信玄擁立を果たしたという。信玄が同11年に諏訪頼重を滅ぼすと、上原城(諏訪市)で占領地の統治に当たった。天文17年2月、信玄が村上義清と戦い、初めての敗戦を喫した上田原の合戦で戦死した。板垣氏は武田氏の族臣として代々活躍した。信方は信虎、信玄の二代にわたり武田の重鎮として重きをなした譜代の老臣である。信方の手腕力量を高く評価していた信虎は、信玄の伝役(もりやく)に任じ、信方は信玄の武將教育に尽力した。「甲陽軍鑑」には、信玄を嫌う信虎の前でいつも信玄をかばったとされている。また文学に熱中しすぎた信玄を死を賭して諫めたというエピソードは勇名である。

NR



甘利備前守虎泰  
(あまりびぜんのかみとらやす)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1498?~1548 出自は甘利氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。甘利備前守虎泰は武田家二代に仕えた武田家譜代の名将。板垣氏と共に組織における重鎮として家老を務めた

甘利氏は甲斐源氏・一条忠頼の流れをくむ武田氏の庶流にあたる一族。平安時代後期には甘利荘が設置され

た甲斐国巨摩郡甘利郷を領していたと考えられている甘利氏は、甲斐源氏の支流にあたり、武田氏を支えて活躍した。武田信虎追放時には、板垣と共に信玄擁立に尽力した。虎泰は信虎、信玄の二代に仕え、信虎の代からの侍大将であった。板垣信方、飯部兵部らとともに合戦では常に先陣をつとめた剛の者として知られている。信玄自身も負傷し、初の負け戦となった天文17年(西暦1548年)2月、信州上田原での村上義清との6時間にもおよぶ激闘で、板垣信方らとともに武運尽きて戦死した。

NR



馬場美濃守信春  
(ばばみののかみのぶはる)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1515~1575 出自は武川衆の一員である教来石郷領主

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。馬場美濃守信春は信州牧ノ島城主。智勇に優れ、21度の合戦に加わって、かすり傷ひとつ負わなかったという

甲信国境の豪族・教来石氏の出身で、天文15年(西暦1546年)、信玄に抜擢され、馬場氏の名跡を継いだという。

川中島の戦いでは、山本勘助とともに「啄木鳥の戦法」を立案し、信玄に献策した。永禄5年より、信濃牧ノ島城に在城し、海津城の高坂弾正とともに上杉謙信の監視をおこった。後代には武田四天王の一人に数えられる。文献によっては房信とも記されている武田信虎、信玄、勝頼の三代に渡り仕えた歴戦の重臣だった。有名な長篠の合戦で勝頼に帰陣を勧めたが受け入れられず、武田軍は壊滅的な打撃を受けた。敗走する武田軍のしんがりという、最も困難な役目を引き受け、安全圏に勝頼が脱出するのを見届けると、馬首をかえして敵陣におどり込み華々しく討死した。

NR



飯部兵部少輔虎昌  
(おぶひょうぶしょうゆうとらまさ)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1504?~1565 出自は飯部氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。飯部兵部少輔虎昌は、飯部または飯富と称される知略抜群の武将で、信濃国佐久郡内山城を領した。「飯部の赤備え」は有名

武田家の譜代家老で山県昌景の実兄。信玄の父親信虎と対立し挙兵したこともある反骨の人であった。信虎追放後

信玄を支え、信濃国内山城、塩田城、室賀城の在番や城主を歴任し、村上義清や上杉謙信の侵攻に備えた。信玄の嫡男義信の傳役となるなど重用されたが、義信と信玄が対立すると、虎昌は義信を庇い、責任を一身に背負って自刃したという。虎昌は「甲山の猛虎」と恐れられた豪勇で、板垣信方とともに信虎、信玄二代にわたって活躍した宿将である。飯部虎昌が率いた飯部隊は「飯部の赤備え」と言われ、騎馬武者から兵卒に至るまで一人残らず武具、差し物、馬具の全てを赤一色に統一していた。赤一色の飯部隊の突撃は火の玉が飛ぶような勢いを見せ、敵は戦う前から戦意を失ったという。

NR



山県三郎兵衛尉昌景  
(やまがたさぶろうびょうえのじょうまさかげ)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

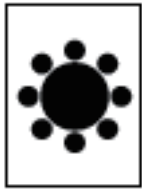
1529~1575 出自は飯部氏(飯富氏)

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。山県三郎兵衛尉昌景は武田家を代表する家臣の一人。三方ヶ原の戦い、長篠の合戦で活躍した

武田家の譜代家老飯部氏の出身で、信玄の側近及び奉行として

活躍した。信玄の命により名門山県氏の名跡を継ぎ、処刑された兄虎昌の配下を始めとする100騎を預かり、譜代家老に連なった。昌景の部隊も飯部氏同様に装備を赤で統一していたことから、「山県の赤備え」と呼ばれたという。駿河江尻城主に就任し、織田・徳川両氏と対峙した。信玄、勝頼の二代に仕え、合戦、戦略、外交、治安、内政などにわたり主君の手足のように動き回り活躍した武将。飯部兵部少輔虎昌の弟で、兄に劣らぬ勇将の片鱗を見せた。長篠の合戦で、武田軍の劣勢を挽回しようと敵陣に突入した昌景は全身に数弾受けたが、落馬せず采配をくわえたまま絶命したといわれている。

NR



### 高坂弾正忠昌信 (こうさかだんじょうのじょうまさのぶ) の旗印



1527~1578 出自は百姓・春日氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。高坂弾正忠昌信は、石和の人、春日大隅の子で16歳の時に武田家に仕える。永禄4年(西暦1561年)に高坂と改姓した

昌信の本名は春日 虎綱(かすがとらつな)。大百姓の子ながら信玄に見いだされて近習となり、足軽大将に抜擢、

永禄三年(西暦1559年)ごろ海津城代に任命されるなど、異例の出世を遂げた。幼名は春日源五郎(かすがげんごろう)。知略横溢の人物として知られており、信玄~勝頼代における代表的な知将である。信玄の寵童だったとも言われている。武田家の滅亡を知ることなく52歳で病没した。後世、昌信の著と伝えられる『甲陽軍鑑』は、武田家興亡の歴史をはじめ武田流と呼ばれる軍学の理論、兵制、軍団の編成と構成、兵器の解説、さらに訴訟公事などが盛り込まれている書で、徳川時代、武家の軍事教科書として広く愛読された。

NR



### 真田弾正忠幸隆 (さなだだんじょうのじょうゆきたか) の旗印



1513~1574 出自は真田氏

創業信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。真田弾正忠幸隆は、真田幸村の祖父。剃髪して一徳齋と名乗った。武勇知略ともに優れていた人物

真田一族は、信濃国小県群を中心に発展した滋野一族の支流で、幸隆は名族海野氏の出身といわれる。天文

10年(西暦1541年)に、信玄の父信虎に攻められ、海野棟綱らとともに上野国に亡命したが、同15年までに信玄に臣従し、信濃経路で活躍した。出家後の一徳齋となった晩年は上野国経路に専心し、岩櫃城、白井城などを攻略し、武田氏の上野国西部制圧を確実にものとした。「六連銭」の旗印で有名な信州の名流である真田氏の氏祖である。信玄が一生に一度の負け戦と言われる村上との戦後、幸隆は策略をもって村上軍をわずかな手勢で撃滅させた話は有名である。これ以後「信玄公あるところ必ず幸隆あり」と言われるほど、輝かしい戦歴を残したことが「真田三代記」などに書かれている。天正元年(西暦1573年)5月、信玄の後を追うように世を去った。

NR



### 内藤修理亮昌豊 (ないとうしゅうりすけまさとよ) の旗印



1522~1575 出自は工藤氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。内藤修理亮昌豊は信虎に殺された工藤虎豊の子。度量大きく困難を好み、真の大將と称された重臣

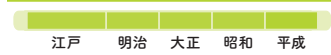
武田氏の譜代家老工藤氏の出身で、元は工藤源左衛門尉と称した。信玄

の側近、奉行として重用され、重要な作戦のほとんどに参加した。馬場信春に代わって信濃国深志城(現在の国宝松本城の前身)の城代となり、永禄末年ごろ内藤家の名跡を継ぎ、修理亮を称した。信玄の弟信繁が川中島で戦死した以降甲陽の副将と称されるほどに知略に優れた武將とうたわれた。長篠の合戦で味方の不利を悟り「力攻めをすれば味方の損害が大ききことは必定。よって長期戦の構えが有利。」と勝頼に進言したが受け入れられず、もはやこれまでと甲州武田武士の最後を飾り、敵の銃火の中へ飛び込んでいった。三重柵をすべて突破するなど奮戦したが、徳川軍に反撃されて戦死した。

NR



### 秋山伯耆守信友 (あきやまほうきのかみのぶとも) の旗印



1527~1575 出自は秋山氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。秋山伯耆守信友は、信州高遠城主。後に美濃の岩村城主となる。外交手腕に秀でていた人物

信友は虎繁とも言われており甲斐源氏の支流で、武田家の譜代家老である。

天文 15 年(西暦1546年)に侍大將に抜擢され、大島城などの城代を歴任、伊那の土豪春近衆を配下に置き、織田・徳川氏を監視した。元龜3年(西暦1572年)、信玄が西上作戦を開始すると信友は美濃に侵攻し、遠山景任未亡人(織田信長の叔母)の守る岩村城を奪取した。長篠の戦いの後、織田信忠軍に包囲されて降伏し、岐阜で処刑された。

元龜3年(西暦1572年)信玄上洛戦の先陣を引き受けた信友は、一軍を率いて伊那谷を進撃した。三方ヶ原の戦いでは、信友は山県昌景隊とともに家康を急追し、命からがら浜松城に逃げ戻った家康は「さても秋山信友、武田の猛牛に似たる恐ろしき男」と言ったといわれる。猛虎猛牛と異名をとるほどの剛のものだった信友の豪胆ぶりが覗かれる。

NR



三枝勘解由左衛門尉守友  
(さいぐさかげゆさえものじょうもりとも)  
の旗印



1537~1575 出自は木原領主  
(現在の山梨県中央市)

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。三枝勘解由左衛門尉守友は、山県三郎兵衛尉昌景の婿で遠州高天神城主。小田原城攻めなどで武功を立てた足軽大将

三枝一族は古代以来の甲斐土着の豪族で、鎌倉時代に入って甲斐源氏の勢力下に入った。父土佐守虎吉とともに

信玄に仕え、守友は奥近習に抜擢され、その後足軽大将となり騎馬30騎、足軽70人を預けられた。守友の武勇に感心した山県昌景が腰刀と山県姓を与え、山県善右衛門と名乗らせたという。

山県昌景ほどの剛の者をも感服させたという守友の戦功は、まず永禄12年(西暦1569年)の小田原攻め、三増峠の合戦での働きがある。長篠の合戦では、守友は信玄の弟・武田信実と嵩ノ巣山に陣どったが、徳川方の率いる4000の軍勢の奇襲攻撃を受け、守友らの防戦も空しく信実、守友らは討死した。守友38歳の時と伝えられている。

NR



原美濃守虎胤  
(はらみののかみとらたね)  
の旗印



1497~1564 出自は原氏(千葉氏族)

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。原美濃守虎胤は鬼美濃の異名で諸国の武将に恐れられた。信虎、信玄の二代に渡って仕えた

下総国千葉氏の一族である原氏の出身で、信虎に仕えた。部下10人で100

人分の働きをするといわれ、鬼美濃と呼ばれ恐れられたという。天文20年には信濃国平瀬城主に任命された。信玄の出家と共に剃髪し、清岩と号した。永禄4年(西暦1561年)、信玄が信濃国境の上杉方の拠点割ヶ岳城を攻めた際に重傷を負い、後の川中島の戦いには参加できなかった。合戦に臨むこと38度、全身に受けた向こう疵は53ヶ所を数えたという剛の者として知られている。虎胤が世を去ったとき信玄は「虎胤は幾多の合戦で限りなき武功をあらわした真の剛の者なり。世人、虎胤を畏敬して鬼美濃と恐れしわが忠臣なり。当家、虎胤のほか美濃を称する者としてなし。」と、勇猛の将の死を悼んだという。

NR



小山田左兵衛尉信茂  
(おやまさひょうえのじょうのぶしげ)  
の旗印



1539~1582 出自は小山田氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。小山田左兵衛尉信茂は郡内領主。信玄、勝頼の二代に仕え、文才の持ち主として信頼されていた

小山田一族は武田家の一門衆(御親類衆)の待遇を受けた名家であり、中津森(後に谷村)に館を構えて都留郡を支配した豪族。信茂は兄弥三郎信有が、永禄8年8月に病没したため家督を相続し、信玄と勝頼の二代に仕えた。勝頼時代には、武田信豊とともに武田氏を支え、上杉氏との同盟交渉では中心的役割を果たした。武田氏滅亡後、織田軍に捕らわれ処刑された。信茂は「甲陽軍鑑」によると騎馬200騎を擁する侍大将とある。現在の都留市に居館を持ち、岩殿山城は防備の山城として警固していた。加えて「甲陽軍鑑」には、信玄の側近にあって合戦の相談や進言をする「弓矢の御談合七人衆」の中に信茂が加わっていたとあり、若輩でありながら信玄に信頼されていたことが記されている。

NR



多田淡路守満頼  
(ただあわじのかみみつより)  
の旗印



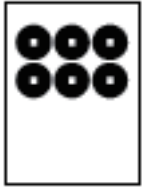
生年不詳~1563 出自は多田氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。多田淡路守満頼は、信濃虚空蔵山砦を警護していた際に地獄の妖怪「火車鬼」を退治したという伝説を持つ雄将

美濃から甲斐に渡り信虎に仕え、後に足軽大将に任命された。以来、数多くの合戦に参加し感状をもらうこと29度

に及ぶ。そのため全身に27か所の傷があったとされる。「火車鬼」退治伝説の他にも、甲府市湯村温泉で天狗を倒した鬼の湯伝説などの逸話が数多くある。原美濃守、小幡山城守、横田備中守、山本勘助らと共に武田の五名臣、甲陽の五名臣としても挙げられる。満頼の伝説である「火車鬼」とは仏典因果経の説く妖婆で、生前に悪事を働いた亡者を火の車に乗せて地獄へ運ぶという仏教経文に出てくる悪心の鬼のことである。つまり満頼の豪勇が現世の及ばない地獄の権力者をも退治できるほどのものであったという例えとして語り継がれていると思われる。

NR



真田源太左衛門尉信綱  
(さなだげんたざえものじょうのぶつな)  
の旗印



1537~1575 出自は真田氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。真田源太左衛門尉信綱は、真田幸隆の長男。三方ヶ原の戦いにおける戦功はめざましかったと伝えられている武将

信玄の命により、父幸隆とともに上野国白井城を攻略。同時期に上野国岩櫃城代にも任せられ、上杉家の南下に備えた。信玄公晩年の合戦にはほとんど参戦しており、その功績により元亀3年には信濃の武士で唯一200騎という最大の兵力を与えられた。川中島の合戦において25歳の青年武将として出陣した。永禄10年(西暦1567年)頃、今川・北条攻めで先陣につく先陣を競って引き受け、信綱の真価を発揮するめざましい活躍を示した。長篠の合戦では青江貞次の陣刀をふりかざして敵陣に切り込んでいった。弟の兵部丞昌輝も負けじと斬り込み、真田兄弟は勇戦して敵を倒すも奮戦虚しく敵の銃弾の前に壮烈な討死を遂げた。

NR



土屋右衛門尉昌次  
(つちだうえものじょうまさつぐ)  
の旗印



1544~1575 出自は金丸氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。土屋右衛門尉昌次は、第4回川中島合戦の激戦において剛将の名を高めた。「片手千人切り」で知られる土屋昌恒の実兄

西郡の豪族金丸虎義の次男として生まれ、金丸平八郎と称していた。信玄の奥近習六人に選抜され、永禄4年9月の川中島の戦いでは、本陣の信玄を守り奮戦したことから、名族土屋氏の名跡を与えられた。元亀元年に右衛門尉に任官され、100騎を預かる侍大将に取り立てられた。昌次は31歳という短い生涯であったが、武田の若手武将として信玄にその将来を大いに嘱望され、信玄没後は勝頼のよき相談相手となった青年将校であったという。長篠の合戦で昌次は勇敢にも単騎で馬どめの柵の中に乗り込み、柵を引き倒そうとしたところを鉄砲隊の集中攻撃を受けて戦死したことが「四戦紀聞」の中に記されている。

NR



横田備中守高松  
(よこたびつちゅうのかみたかとし)  
の旗印



1487?~1550 出自は未詳

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。横田備中守高松は、戦場に臨むこと34度。31に及ぶ戦傷があったという。「甲陽の五名臣」の一人に数えられた知将

伊勢国出身の浪人であったが、信虎に召し抱えられ騎馬30騎、足軽100人を率いる足軽大将となった。信虎、信玄二代の重要な作戦の内、34度に渡り参加した。そのため全身に31カ所の疵痕があったと伝えられている。観察力と洞察力に優れ、敵の動きによってその戦術を読み取り、先手、先手と手配りしては常に甲州軍を勝利に導いたという知謀の将であった。村上軍との戦で殿軍をつとめた高松隊が背後から襲い掛かる村上軍と戦う間に、信玄は本陣とともに安全地帯に向かった。しかし、村上軍に包囲された高松は、隊の1000人と共に戦死した。

NR



小幡山城守虎盛  
(おばたやましろのかみとらもり)  
の旗印



1491~1561 出自は甲州小幡氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。小幡山城守虎盛は織部、後に山城守を名乗り、剃髪し入道となって法名を日意とした。鬼虎の異名を持つ

虎盛は遠江国出身の浪人で、父日浄と共に武田氏に仕官し、騎馬15騎、足軽75人を預かる足軽大将に任じられたという。信虎・信玄二代の重要な作戦のほとんどに参加し、永禄3年に信濃海津城が完成すると、高坂弾正を補佐役として在城した。虎盛は、父日浄亡き後14歳で小幡家の跡目を継ぎ、信虎の代にすでに足軽大将となっており、信玄の代には鬼虎の異名をもって知られた剛将であった。永禄4年(西暦1561年)9月の川中島合戦を目前にした6月に病死した。没年は71歳という。虎盛は臨終に際して「よく身の程を知れ」という九文字の遺言を残し、これを子孫への訓戒としたと伝えられる。

NR



小幡豊後守昌盛  
(おばたぶんごのかみまさもり)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1534~1582 出自は甲州小幡氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。小幡豊後守昌盛は、小幡山城守虎盛の子。聡明で武道と共に学問をよく修めた文武両道の武将

小幡虎盛の子である小幡豊後守昌盛は、父の死後自ら信玄の旗本となり、足軽大将として活躍するよ

うになる。馬の名手であり、敵情視察に赴き敵に追われても決して捕まらなかったといわれている。武田氏滅亡の際は病気のため、勝頼に従うことができず、甲府善光寺門前で暇乞いをしてまもなく死去した。信玄・勝頼の事績を描いた「甲陽軍鑑」の編者小幡景憲は、昌盛の三男である。昌盛の次男は彦根藩士となり、その後も小幡家は脈々と続いた。父虎盛没後は海津城副将の地位に推されるが昌盛は信玄の旗本におさまることを望み訴訟を行い、信玄の怒りを買って甲府妙音寺に蟄居となり切腹を命じられるが、諏訪勝頼や土屋昌統の懇願により赦免され、足軽大将に留まったとする逸話を「甲陽軍鑑」が記している。

NR



原隼人佑昌胤  
(はらはやとのすけまさたね)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1531~1575 出自は原氏(土岐氏族)

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。原隼人佑昌胤は地理守備の術に優れた武将。陣場奉行として陣取りに才能を発揮していた足軽大将

信虎に仕えた譜代家老原加賀守昌俊の子で、武田軍の陣立てなどを立案す

る陣場奉行を命じられたと言われ、また信玄の側近、奉行としても活躍した。信玄の晩年には、山県昌景と共に、武田家の最高職である両職を担ったとされる。昌胤は地理に精通し、初めての場所でも方角を見失わなかったという。天正3年の長篠の合戦で山県と共に左翼を担当し、徳川軍と激戦の末戦死した。昌胤は、知将とうたわれた父同様非凡な才能をもち、信玄の期待通りの鮮やかな陣馬奉公ぶりを発揮して「陣取りのことは隼人にまかせよ」と信玄にいわしめたほどであった。「甲陽軍鑑」も「他国にて山中などに道知られざる所をも、この隼人にては一見してふみ分けること、武田家中に此人一人なり」と昌胤の地利、地形を見る鋭い才能を称えている。

NR



一条右衛門大夫信龍  
(いちじょうえもんのだゆうのぶたつ)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1539?~1582 出自は武田氏

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。一条右衛門大夫信龍は、甲斐國市川郷上野城主。信虎の子で、一条家の跡を継いだ。風流を好み、花を愛でていたという

信虎の8男(実は9男という説もある)であり信玄の異母弟。武田氏の一門衆(御親類衆)として、100騎を率いた。

信龍は、常日頃から、武具の手入れや更新を怠らず、諸国の浪人の中から、逸材を召し抱えるよう心がけていた。天正10年(西暦1582年)の武田氏滅亡の際には、本拠地上野城に籠城して徳川家康と戦い、信就と共に市川で処刑されたと伝わる。戦闘時には、主に後衛を担当していたためか武名は伝わっていないが、「甲陽軍鑑」では、山県昌景、馬場信春など重鎮7人の武将のうちに数えられている。武田信玄が軍事面において、典厩信繁と大夫信龍を最も信頼していたという記述がある。また「伊達者にして花麗を好む性質なり」との評も伝わっていた。

NR



山本勘介晴幸  
(やまもとかんすけはるゆき)  
の旗印

江戸 明治 大正 昭和 平成

1493?~1561 出自は庵原氏未詳

信玄公祭りに登場する武田二十四将の旗印。山本勘介晴幸は、板垣駿河守の推挙により信玄に仕えた。兵法に優れ、名参謀の軍師として広く知られている

三河国牛窪出身の浪人で、隻眼となり片足も不自由になったという。天文12

年(西暦1543年)、板垣信方の推薦で、信玄に召し抱えられ、足軽大将となる。内政、軍略、築城術に関する信玄の諮問に答え、様々な意見を具申する軍師として重用された。永禄4年(西暦1561年)の川中島の戦いで、上杉謙信撃滅の秘策として、「啄木鳥戦法」を進言するが失敗し、責任を痛感して乱戦の中に身を投じて戦死した。近世には武田二十四将に含められ、武田の五名臣の一人にも数えられて、武田信玄の伝説的軍師としての人物像が講談などで一般的となっているが、「山本勘助」という人物は『甲陽軍鑑』やその影響下を受けた近世の編纂物以外の確実性の高い史料では一切存在が確認されていないために、その実在について長年疑問視されていた。しかし近年は「山本勘助」と比定できると指摘される「山本管助」の存在が複数の史料で確認されている。

NR